

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24242011

研究課題名(和文) 東アジア古典学の実践的深化 - 国際連携による研究と教育

研究課題名(英文) Practical Intensification of East Asian Classical Studies: Research and Education Through International Cooperation

研究代表者

齋藤 希史 (SAITO, Mareshi)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：80235077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 25,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本・中国・朝鮮を対象とする研究者の相互討議によって、漢字世界としての東アジアという視点から、東アジア古典世界の全体像を共有し、理解を深め、書籍・論文・学会発表などの形式で成果を発信した。また、大学院生も交えたセミナー「東アジア古典学の方法」を国内外で15回にわたって開催し、東アジア古典学という研究領域を軸として、専門分野や地域を超えた研究および教育の協働関係を構築することに貢献した。

研究成果の概要(英文)：This research, through mutual discussion by scholars studying Japan, China, and Korea and from the viewpoint of East Asia as a Sinographic world, communicates its research results by sharing a complete picture of the world of the East Asian classics. This is achieved by deepening understanding, through the publication of books and articles, and by scholarly meetings. The seminar "Methodology of East Asian Classical Studies," which includes participation by graduate students, has been held fifteen times in Japan and overseas, and taking the research area of East Asian classics study as its axis, has contributed to research that overcomes disciplinary and regional boundaries and formulates cooperative connections in education.

研究分野：中国古典文学・東アジア文化論

キーワード：東アジア古典学 古代日本 中国中世 古代朝鮮

1. 研究開始当初の背景

2007-10年度 基盤研究(A)「東アジア古典学としての上代文学の構築」(研究代表者:神野志隆光)は、日本の古代文学研究の枠組の問い直しを提起し、研究対象を東アジア世界へと開き、同時に中国魏晋南北朝期と朝鮮三国時代からの視点を取り込み、さらに東アジア、北米の研究者も交えた国際連携によって、新しい「東アジア古典学」の礎を築くことに成功した。そして、本科研プログラム「東アジア古典学の実践的深化 国際連携による研究と教育」(研究代表者:齋藤希史)は、上記「東アジア古典学としての上代文学の構築」において基礎づけられた「東アジア古典学」の研究および教育構想を継承するものとして、2012年にスタートした。

私たちは、古代文学研究において新たな地平をひらき、同時に教育実践においても現下の危機的状況を打破しうる方向性を模索すべく、「東アジア古典学」として古代文学研究を再構築する共同研究を推進してきた。再構築のための視点として古代東アジアを一つの文学世界として捉えようとする点にこの共同研究の特徴がある。中国大陸において先進的に形成されていた文化を中心としつつ、それを延伸して、共通の文字(漢字)、共通の文章語(漢文)により、リテラシーの基盤と価値観とを共有する世界として、インドシナ半島・内陸アジア・朝鮮半島・日本列島にいたる東アジア世界は成り立っていた。各地域に固有の文化はあったが、それと同時に、リテラシーを共有することで作られる東アジア世界という大きな圏域が構成され、その上に古代文学世界はあった。影響・受容といった次元とは異なるその実相を捉えるためには、民族文化的・国民文化的に各国の古典(日本の古代文学、あるいは中国、朝鮮の古代文学)を捉える近代のパラダイムは有効ではない。「漢文離れ」が加速する現下の研究・教育の危機的状況もまた、そうした各国文学的な発想の帰結といえる。私たちは、研究と教育との両面から現状を打破すべく共同研究プロジェクトを開始した。

2. 研究の目的

本研究は、漢字世界としての東アジアという視点から、日本・中国・朝鮮の古典世界を対象とする研究者を中心とした共同研究によって東アジア古典文学史の再構築をめざし、研究成果の上に立った大学院レベルの教育プログラムの学際的・国際的な実用化をはかることを目的とした。

さらに、日本国内および東アジアの研究者のみならず、北米等の東アジア以外の地域を活動拠点とする研究者と問題認識を実践的に共有し、専門分野や地域を超えた研究および教育の協働関係を持続するための制度構築にも、重要な課題として取り組んできた。

3. 研究の方法

具体的には、第一に、新たな文学史の構成を目標に、共同研究の軸となる共同研究会を計画的・発展的に継続すること、第二に、実践的な教育・実習プログラムの完成を旨とし、国内外において実験授業を実施し、あわせて共同討議をすすめること、第三に、教育プログラムに応じた教科書の刊行を旨とし、その作成の討議と具体的な制作作業をすすめること、さらに、全体にかかわることとして第四に、国内のみならず国際的な討議と発信が可能な環境を維持し、さらに発展させていくことが挙げられる。先行する科研プログラム「東アジア古典学としての上代文学の構築」の成果を受け、初年度からこれらすべての点を実行に移してきた。

4. 研究成果

まず、共同研究の軸となる共同研究会として「東アジア古典学の方法」を立ち上げ、2012年度から最終年度の2014年度までの3年間に、通算15回を開催することができた。国内では東京大学をはじめ、北海道大学、明治大学、日本大学を会場とし、討議と交流を深め、国外でもコロンビア大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、韓南大学校、成均館大学校で開催の機会を得て、主に北米と東アジア地域を活動拠点とする研究者と、「東アジア古典学」という問題意識を共有するにいたった。

研究会のテーマも、「韓国に行われた千字文 資料紹介を中心に」(2012年11月29日、講師:林熒澤[成均館大学])、「漢文と近代朝鮮時代のエクリチュールとして」(2013年2月5日、講師:金龍泰[成均館大学]、韓榮奎[成均館大学]、黄鎬德[成均館大学])、「漢字世界のなかの列島の古代」(2013年8月7日-8日、講師:神野志隆光[東京大学・明治大学]、金沢英之[北海道大学])、「古代石碑研究の現在」(2013年10月11日、講師:橋本繁[早稲田大学]、吉村武彦[明治大学])、「漢字世界の古典と近代 近代日本の文体をめぐって」(2014年3月7日、講師:齋藤希史[東京大学])、「祇園精舎の鐘の声考 祇園寺図経覚書」(2014年6月20日、講師:黒田彰[佛教大学])、「近代東アジアにおける漢文体 権威と通用」(2015年3月12日、講師:齋藤希史[東京大学])、「大学における古典教育」(2015年5月28日、講師:小野桂子[プリンストン大学]、デイビット・ルーリー[コロンビア大学])など多岐にわたる。参加者は、アメリカ・日本・韓国等で東アジア古典学を学ぶ研究者や大学院生を中心とするが、具体的な資料読解の方法と習得から、理論構築を目指した問題意識の共有まで、多様な形態で研究会が開催され、参加者からも高い評価を得ることができた。とりわけ、コロンビア大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校においては、それぞれの大学院教育プログラムに大きく貢献するものとして、今後ともこの研究会を継続的に行うよう希望

が出された。2015年度に本科研の後継プログラムとしてスタートした科研プログラム「東アジア古典学の次世代拠点形成 国際連携による研究と教育の加速」(代表: 齋藤希史)は、この共同研究会「東アジア古典学の方法」の開催を継続しており、さらなる研究交流の促進を図っている。

さらに、国内外で実験授業を開催し、各大学での実践的な大学院教育プログラムの構築に寄与することができた。その典型的な成果としては、2015年3月9日から13日にかけて韓国の諸大学で開催したセミナー・集中講義をあげることができる。すなわち、韓南大学校で開催された特別講演「ひとつの漢字世界としての東アジア」、高麗大学校での特別講義「漢字世界としての東アジア」、成均館大学校で特別講演「方法としてのテキスト理解」および「近代東アジアにおける漢文体権威と通用」、誠信女子大学校での集中講義「東アジア古典学の理解」を連続して行ったことである。この一連のセミナー・集中講義では、国内の東アジア古典学研究者8名を韓国に派遣し、最新の研究内容を現地の研究者や大学院生と共有し、議論することができた。なお、講義の内容は冊子および紀要として刊行された。

また、英語圏の漢文学習者向けのテキスト作成のプロジェクトについても、その具体化に向けて進捗があった。デイビット・ルーラー[コロンビア大学]、小野桂子[プリンストン大学]、トーキル・ダシー[カリフォルニア大学ロサンゼルス校]、クリスティーナ・ラフィン[プリティッシュコロンビア大学]の各氏に執筆協力を依頼し、テキストの構成や取り扱う文献、執筆担当箇所などの打合せを行ってきた。また、2015年5月28日に行われたワークショップでは、各大学の古典教育の現状について報告が行われ、求められる教材の内容について、具体的に意見をかわすことができた。なお、この漢文教科書作成のプロジェクトについても、後継プログラム「東アジア古典学の次世代拠点形成 国際連携による研究と教育の加速」(代表: 齋藤希史)に引き継がれ、完成に向けて討議が重ねられている。

これらの研究会・講演・ワークショップ・会議の記録は随時ホームページ上に掲載され、参加者が共有するグループウェアにおいて資料も共有された。

また、本科研における討議や発表にもとづいて生み出された著書・論文の数も多い。5に挙げる著書・論文等はその主要なものであるが、「東アジア古典学」の射程の広がりを見せよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計28件)

金沢英之、『日本書紀』の「皇祖」をめぐって 巻二・巻三における叙述の基点、美夫君志、査読無、巻90、2015、pp.1-13

黒田彰、崑崙と獅子 祇オン寺図経覚書、京都語文、査読無、巻21、2014、pp.129-153

田村隆、青表紙本の系譜、中古文学、査読有、巻94、2014、pp.14-20

田村隆、卑下の叙法、国語と国文学、査読有、巻91-11、2014、pp.28-38

神野志隆光、吉野行幸の「儲作歌」をめぐって、高岡市万葉歴史館叢書、査読無、巻30、2014、pp.76-93

道坂昭廣、古文辞受容以降の日本漢文について 齋藤拙堂『拙堂文話』を手がかりに、漢文學報、査読有、巻30、2014、pp.244-259

徳盛誠、福沢諭吉による「自由」の表現 十八世紀日本の観点から、日本比較文学会東京支部研究報告、査読無、巻11、pp.39-45

齋藤希史、近代東アジア主義と漢文 岡本監輔の場合、中国 社会と文化、査読有、巻28、2013、pp.11-27

田村隆、『伊勢物語』初段挿絵考、超域文化科学紀要、査読無、巻20、pp.253-264

黒田彰、孝鳥、朱明、章孝母図攷、万葉集研究、査読無、巻34、2013、pp.251-309

黒田彰、祇園精舎覚書 鐘はいつ誰が鳴らすのか、京都語文、査読無、巻20、2013、pp.109-151

神野志隆光、『万葉集』の「歴史」世界 巻六をめぐって、万葉、査読無、巻214、2013、pp.1-27

道坂昭廣、正倉院蔵『王勃詩序』中の「秋日登洪府滕王閣餞別序」について、敦煌寫本研究年報、査読有、巻7、2013、pp.149-165

齋藤希史、「文学論」の射程 ディスクールとしての科学、文学、査読有、巻13-3、2012、pp.44-45

齋藤希史、景観のエクリチュール 志賀重昂『日本風景論』から、日本学研究、査読有、巻36、2012、pp.7-24

〔学会発表〕(計 40 件)

金沢英之、『日本書紀』の「皇祖」をめぐって、美夫君志会全国大会、2014 年 7 月 5 日、中京大学(愛知県名古屋市)

黒田彰、新出の平仮名本三国伝記について、説話文学会大会、2014 年 6 月 29 日、同志社大学(京都府京都市)

神野志隆光、世界をあらしめる『万葉集』、上代文学会、2014 年 11 月 29 日、二松学舎大学(東京都千代田区)

黒田彰、關於祇園図経、東亜漢籍研究：以日本古鈔本五山版漢籍書中心、2014 年 3 月 15 日、北京大学(中国)

黒田彰、舜の物語攷 孝子伝から二十四孝へ、孝文化在東亜的伝播和發展国際検討会、2013 年 11 月 3 日、精華大学(中国)

神野志隆光、語られた「古代」 『日本書紀』とその変奏、国際学術研究会「交響する古代」、2013 年 11 月 1 日、明治大学(東京都千代田区)

道坂昭廣、王勃南行考 以日本伝存王勃集佚文為線索、2013 年 12 月 9 日、香港大学(香港)

徳盛誠、Necessity of Reasoning: Ichijo Kaneyoshi's Interpretation on the Nihon Shoki in the Premodern Japan、国際比較学会第 20 回大会、2013 年 7 月 20 日、パリ大学(フランス)

道坂昭廣、日本漢文学における初唐文学の影響についての初歩的検討 『懐風藻』と『本朝文粹』の詩序から、「東アジアの漢文学、固有性と共同性 東アジア古典学の可能性と難関」、2012 年 11 月 24 日、成均館大学(韓国)

金沢英之、八千矛神の「神語」をめぐって、萬葉学会、2012 年 10 月 21 日、島根県立大学(島根県浜田市)

神野志隆光、文学史のために 固有の言語世界は自明か、第三回高麗大学校・明治大学国際学術会議『韓・日文学歴史学の諸問題』、2012 年 9 月 13 日、高麗大学(韓国)

徳盛誠、Kaiho Seiryō: The Realm of Rhetoric、International Symposium: Approaches to the Study of Japanese Culture and Thought in the Early Modern Age、2012 年 9 月 13 日、フランクフルト

大学(ドイツ)

齋藤希史、The Space of Cultivated Speech (Yayan): Writing and Language in the Sinographic Sphere、International Conference: Thinking about Cosmopolitan and Vernacular in the Sinographic Cosmopolis、2012 年 7 月 2 日、Institute of Asian Research、ブリティッシュコロンビア大学(カナダ)

田村隆、『伊勢物語』初段挿絵考、九州大学国語国文学会、2012 年 6 月 8 日、九州大学(福岡県福岡市)

齋藤希史、翻訳と訓読 現地化される文字として、「東アジア古典翻訳と文明の疎通」国際学術会議(招待講演)、2012 年 5 月 31 日、釜山大学

〔図書〕(計 13 件)

齋藤希史、新潮社、漢字世界の地平、2014、223

齋藤希史、角川学芸出版、漢文脈と近代日本、2014、252

神野志隆光、講談社、本居宣長『古事記伝』を読む、2014、297

齋藤希史、角川学芸出版、漢詩の扉、2013、200

神野志隆光、東京大学出版会、万葉集をどう読むか、2013、277

神野志隆光、講談社、古事記とは何か、2013、357

徳盛誠、朝日新聞出版、海保青陵 江戸の自由を生きた儒者、2013、361

金沢英之、講談社、義経の冒険、2012、280

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://eacs.c.u-tokyo.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 希史 (SAITO, Mareshi)
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：80235077

(2) 研究分担者

神野志 隆光 (KONOSHI, Takamitsu)
東京大学・総合文化研究科・名誉教授
研究者番号：60018900

徳盛 誠 (TOKUMORI, Makoto)
東京大学・総合文化研究科・講師
研究者番号：00272469

田村 隆 (TAMURA, Takashi)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：70432896

黒田 彰 (KURODA, Akira)
佛教大学・文学部・教授
研究者番号：80178136

道坂 昭廣 (MICHISAKA, Akihiro)
京都大学・人間・環境学研究科・教授
研究者番号：20209795

金沢 英之 (KANAZAWA, Hideyuki)
北海道大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00302828

(3) 連携研究者

()

研究者番号：